

# 「文化」とは

石井 拓洋 (音楽文化論、文化批評)  
女子美術大学非常勤講師

たとえば「文化的水準」、「異文化」、あるいは「文化財」の使用にみる通り、この語に含む内容は多様である。文化研究の泰斗であるレイモンド・ウィリアムズによれば、今日の“culture”の語の意味は、西欧の18世紀以来の2つに加えて20世紀初めに現れた1つの、およそ3つの意味を有するという。それは18世紀以来からの1). 「耕作」の意味から派生した「人間の発達の過程」としての教養の意味と、2). 啓蒙的な「文明」に対する語としてドイツ・ロマン主義において発達した「国民の伝統文化を強調」する意味であり、さらに20世紀初めに現れた3). 「知的、とくに芸術的な活動の実践やそこで生み出される作品」の意味である<sup>1</sup>。今日では上記3). の意味が普及しているとはいえ、総じて「文化概念は〔西欧〕近代の発明品」であり、それを相対的な視点から見れば、今日では〈文化〉を实体として〈本質主義〉的に捉えることはできず、独立変数のような「さまざまな時代、地域の文化理解のための自明の分析概念とはなり得ない」ことが20世紀を通じて考察されてきた<sup>2</sup>。したがって、今日、〈文化〉を考える上では「広い意味での構築主義的立場を前提にしている」と社会学者の吉見俊哉が述べる通り、〈文化〉を〈イデオロギー〉によってつねに社会的に構築されるものとして捉えるべきであろう<sup>3</sup>。

社会との関わりの中で〈文化〉を捉えていくとする視座において、今日においてもその理論的根拠の一つと指摘されるのが〈マルクス主義〉である<sup>4</sup>。伝統的マルクス主義の〈史的唯物論〉が、一般には、〈土台〉が〈上部構造〉を一方的に決定する〈経済決定論〉において硬直的に解釈されていたのに対して<sup>5</sup>、アルチュセールは〈重層的決定〉(overdetermination)<sup>6</sup>の概念をマルクスの再読から導き、「一方では(経済的)生産様式による最終審級における決定があり、他方では上部構造の相対的自律性とその独自の有効性がある」<sup>7</sup>ことを主張した。彼は、従来明確にされることのなかった〈イデオロギー〉の語を定義し、それが、〈土台〉を反映するのみの非物質としての「意識の問題」ではなくて、むしろ物事を生み出す発端として、つまり唯物論における〈物質〉というべき、「社会的過程の一つの審級(領域)」として新たに捉えた<sup>8</sup>。かかる「生産者と

しての作者」<sup>9</sup>としての唯物論美学によって〈土台／上部構造〉のモデルを放逐し、〈イデオロギー〉はもはや〈土台〉でも〈上部構造〉でもなく、一面では「いわば下部構造の下部構造」ともいうべき、「( 経済的 ) 再生産を『決定する』ものとして認識されたのである<sup>10</sup>。

このようにアルチュセール以後の「マルクス主義の立場からするならば、『文化』はイデオロギーの一形態である」<sup>11</sup>。この文脈において、アルチュセールの立場は、ウィリアムズの〈文化唯物論〉( **cultural materialism** )に引き継がれ、彼は〈文化〉を「社会的で物質的なものとして考察」<sup>12</sup>する視座を得る。吉見は、このウィリアムズの視座を、ピアノをめぐる〈文化〉において解説しているが、伝統的マルクス主義の枠組みで言えば、「ピアノ製造は『土台』、ピアノ演奏は『上部構造』に位置づけられる」が、〈文化唯物論〉の観点では「ピアノの製造〔物質的生産〕と演奏〔意味的生産〕は、一方が物質的、他方が非物質的という仕方では分けられ」ず、両者はともに物事を生み出す発端との意味で唯物論的な〈物質〉として認識すべきであり、そのように多様な「物質的な文化実践が結び合わされた領域」、として捉えるべき概念とされる<sup>13</sup>。これはアルチュセール研究で知られる哲学研究者の今村仁司による「物質的行為とイデオロギーは同じ事態の裏表」との指摘とともに理解すべきであろう<sup>14</sup>。

したがって、さしあたり、われわれはアルチュセール以後の〈マルクス主義〉を理論的根拠とし、さらにウィリアムズの〈文化唯物論〉の視座を踏まえることにしたい。つまり、〈文化〉については、前述の 3). と 2). の意味においてそれを多様な文化的実践の結合として捉えるとともに、「他の社会活動によってつくられた秩序の直接、間接的な産物」でありながら、その一方で、政治・経済的な力を一方的に反映するようなものではなく、それ自体が、物事の発端たる〈物質〉的な力を有するものとして捉えてみたい<sup>15</sup>。

( 初稿 : 2015 年 10 月 8 日、改訂 : 2018 年 9 月 28 日 )

---

<sup>1</sup> レイモンド・ウィリアムズ『完訳キーワード辞典』椎名美智ら訳、東京：平凡社、1976年=2002年、83～89頁。

<sup>2</sup> 吉見俊哉「文化」、『現代社会学事典』見田宗介顧問、大澤昌幸、吉見俊哉、鷺田清一編、東京：弘文堂、2012年、1128頁。

---

3 吉見、同前、1129 頁。

4 「作品を、それが生み出された歴史的条件のなかで解釈するという、現代の批評理論の主要な潮流をなす歴史主義的方向は、かならずしもマルクス主義批評に起源を持つものではないとしても、マルクス主義批評によって理論的強度を得たといっていいたいだろう」（丹治愛編『批評理論』東京：講談社選書メチエ、2003 年、115～116 頁。）。「〔本質主義的な視座からの〕素朴な文化論に対するもっとも強力な批判者となってきたのはマルクス主義である」（吉見俊哉「文化」、『現代社会学事典』1128 頁。）。吉見はまた、マルクス主義以外にも、そのような視座の理論的根拠にポスト構造主義のアプローチを挙げる。

5 マルクスらの〈史的唯物論〉は、経済基盤たる〈土台〉（base）〔物質的次元〕が、文化、政治、思想などの〈上部構造〉（super structure）〔イデオロギー＝「虚偽意識」、非物質的次元〕の在り方を、常に一方的に反映するものとして解釈されてきた。ただしそれは、マルクスやエンゲルの真意ではなく、たとえばアルチュセールは次のように、エンゲルスが指摘した件、すなわち〈史的唯物論〉を極端な〈経済決定論〉として「若いエコノミスト」が「曲解」の上「馬鹿げたものに変えて」しまうことを紹介している（「生産は、規定的要因であるが、だが『最終的に〔最終審級において〕』のみそうなのだ。『マルクスもわたしもそれ以上のことを主張しなかった』。『この言葉を曲解して』、経済的な要因は唯一の規定的要因であると主張する者は、『この言葉を、空虚で、抽象的で、馬鹿げたものに変えてしまうであろう』）。ルイ・アルチュセール「矛盾と重層的決定：探究のためのノート」、河野建二ら訳『マルクスのために』東京：平凡社ライブラリー、1965 年=1994 年、182 頁。

6 ルイ・アルチュセール『マルクスのために』、149～225 頁。

7 アルチュセール、同前、182 頁。

8 今村仁司「新版序論 アルチュセールのアクチュアリティ」『アルチュセールの思想：歴史と認識』東京：講談社、1993 年、33～36 頁。「社会的過程」〔社会過程〕とは「社会学上は、個人人間の心的作用から始まる結合の過程をもいう」（「社会」『広辞苑』第五版、1232 頁。）。

9 テリー・イーグルトン『批評の政治学：マルクス主義とポストモダン』大橋洋一、鈴木聡、黒瀬恭子、道家英徳、岩崎徹訳、東京：平凡社、1986 年=1986 年、27 頁。

10 今村仁司『アルチュセールの思想』、35 頁（「いわば下部構造の下部構造とすらいえる。〔(経済的) 再生産を『決定する』のである〕」）。

11 吉見俊哉「文化」、『現代社会学事典』、1128 頁。

12 テリー・イーグルトン『新版文学とはなにか』大橋洋一訳、東京：岩波書店、1996 年=1997 年、349 頁。

13 吉見俊哉「文化唯物論」、『現代社会学事典』、1137 頁。

14 今村仁司『アルチュセールの思想』、36 頁。

15 レイモンド・ウィリアムズ『文化とは』小池民男訳、東京：晶文社セレクション、1981 年=1985 年、10～13 頁。